

## 日本キリスト教会 大阪北教会

2018年4月15日(日) 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

### 聖書 フィリピの信徒への手紙3章1節～11節

1 わたしの兄弟たち、主において喜びなさい。同じことをもう一度書きますが、これはわたしには煩わしいことではなく、あなたがたにとって安全なことなのです。2 あの犬どもに注意しなさい。よこしまな働き手たちに気をつけなさい。切り傷にすぎない割礼を持つ者たちを警戒しなさい。3 彼らではなく、わたしたちこそ真の割礼を受けた者です。わたしたちは神の霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇りとし、肉に頼らないからです。4 とはいえ、肉にも頼ろうと思えば、わたしは頼れなくはない。だれかほかに、肉に頼れると思う人がいるなら、わたしはなおさらのことです。5 わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、6 熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。7 しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。8 そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみえています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、9 キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。10 わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみに与かって、その死の姿にあやかりながら、11 何とかして死者の中からの復活に達したいのです。

### 口語訳 聖書フィリピ人への手紙3章8節～11節

8 私は、更に進んで、私の主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値の故に、一切のものを損と思っている。キリストの故に、私はすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、私がキリストを得るためであり、9 律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づく神からの義を受けて、キリストの内に自分を見出すようになるためである。10 すなわち、キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死の様に等しくなり、11 何とかして死人のうちからの復活に達したいからである。

### 説教『キリストを知ることのすばらしさ』

◆今朝ご一緒に読みます聖書の箇所は、使徒パウロのフィリピの信徒への手紙3章1節～11節であります。この「フィリピの信徒への手紙」は、「喜びの手紙」・「喜びの書簡」と呼ばれて来ました。それは今日の箇所1節に、「わたしの兄弟たち、主において喜びなさい」とありますし、また4章4節でも「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」とあります。このフィリピ書全体がパウロの「讚美歌」、「キリスト賛歌」と言ってもよい内容であります。特に2章6節～11節は初代教会のキリスト賛歌の引用だと言われています。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者に

なられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです。」私たちが主と仰ぐイエス様は、私たちの僕になって下さった御方なのです。

◆今日の8節においてパウロは「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています」とまで言うております。今日の説教題を「キリストを信じる事のすばらしさ」としましたが、今読みましたパウロの言葉からしますと、「キリストを知ることのすばらしさ」としても良かったかと思えます。

◆8節でパウロは「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさ」と言いますが、私たちが以前用いていました口語訳聖書では、「わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、一切のものを損と思っている」と訳されていました。これは、或いは「キリスト・イエスを知る知識の絶対の価値」と訳してもよいと思えます。「主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値」は、「主キリスト・イエスを知る知識に代わるものは何もない。」「キリストを知る知識を越えるものは何もない」と言いかえても良いと思えます。何ものも比肩できないキリストの絶対の価値であります。そういうことを言い表す表現であります。パウロは、「イエス・キリストを知ることの絶対の価値、無比の価値」ということを言いたいのです。

◆この「キリストを知る」という一事に、神様の祝福の全てが含まれています。私たちがどのような危機の中にあっても、行き詰まりの中にあっても、私たちはキリストの不変の御愛の中にあるのです。「キリストにあって」とか「主にあって」というパウロの独特の表現は、ギリシャ語で、“エン・クリストー”とか“エン・キュリオー”という言葉なのですが、英語ならば、“IN CHRIST” “IN THE LORD”ということになります。この表現は、この私という人間がいかなる者であれ、その私がどういう状況にあるにもせよ、わたしは主なるキリストの御顧み・御愛の中にあるのだとの信仰の確信を表現するものであります。

◆私たちが用いております新共同訳聖書の中で良い訳だと思ふものの一つは、本書の1章1節で「キリストにあって」という表現を「キリストに結ばれている」と訳している事です。私たちは、何がどう崩れようと、十字架に死に、甦られ、今も、永久に生きておられる主イエス・キリストに結ばれているという事が、“エン・クリストー”なのです。私達は、キリストに結ばれ、キリストに包まれているのです。この事実は不動です。このようなパウロの信仰・確信を私たちも受け継いでいるのです。

◆それで、今年の6月に婦人部の修養会があり、その主題を「聖書にみる信仰の継承」～伝えでやあるべき み救いのかしこさ～として準備しておりますが、本当にこれ程にすばらしい事柄、恵みを伝ええないではおれない思いに駆り立てられるのであります。しかしこの信仰、キリストを知る事のすばらしさは、我々人間のどのような熱心によっても、我がものとすることはできません。他者に伝えることはできません。このような知識、信仰、認識等々、どのように言い換えてもよいのですが、これらは、ただキリスト御本人から戴く以外にありません。キリスト御自身から私たちに与えられる以外

にありません。キリスト御自身の「自己啓示」によってのみ与えられるものなのです。

◆ですから、わたしたちがキリストを知る知識の絶大な価値に目覚める時には、「主イエス様の自己啓示」という「奇跡」が起こったという事であります。それ故にこそ、私たちは、このキリストにおける無比なる恵みを、何としてでも肉親、家族に伝えたいと願うのであります。この信仰の恵みと祝福に与ってほしいと願い、祈ります。然しながら、これは比べるべきものなき難事であります。しかし、愛に富み給う神様は、イエス様は、このいと小さきこの私にさえ目を留めて下さり、顧みて下さって、御自身を現わして下さいましたのですから、私たちの子供たち、孫たち、肉親の全てをも目に留め、その善き御心を、善き時に果たして下さいるに違いありません。それは私たちの経験からしても確実なことであります。ですから私たちは、これ程の恵みを賜った神様を信じ、イエス様を信じ、感謝し、御名をほめたたえつつ生きる。そのような中で、神様はその善き御心を必ず果たして下さいます。

◆ところで、私たちのこの聖書は、旧約聖書・新約聖書合わせて、66巻からなる正典であります。これを日曜学校の生徒は、掛け算で、 $3 \times 9 = 27$ 、 $39 \text{巻} + 27 \text{巻} = 66 \text{巻}$ と覚えます。そして、新約聖書27巻のうち、使徒パウロの名による手紙が13巻もあります。半数近いのであります。この旧約聖書・新約聖書合わせて66巻の聖書は、わたしたちの信仰と生活の規範であり、正典であります。それで、この66巻の文書が「正典」と認められたのは、紀元397年のカルタゴでの「教会会議」においてでありました。と言うことはどういうことかと申せば、新約聖書27巻は、凡そ紀元100年位までに成立しております。ですから、紀元397年と云えば、それから約300年後の事であります。その間に、これらのパウロの手紙は、本当に我々の信仰の規範になるかという試練、テストにさらされたという事です。そしてこれらのパウロ書簡は、神様の御言葉、イエス様の御言葉の信頼に値する証しの書であること、我々キリスト者の信仰の規範・正典であることが公認されたということであります。

◆ところで今日の2節で使徒パウロはこうっております。「あの犬どもに注意なさい。よこしまな働き手たちに気をつけなさい。切り傷にすぎない割礼を持つ者たちを警戒しなさい」と。「割礼」は神の民・イスラエルの徴でした。これは旧約の民・イスラエルの〈男児〉が、生後8日目に受けるものです。イエス様も受けられ、パウロも受けたものであります。割礼は、洗礼と違い、男子だけに限られます。先日もわが国の国技と言われる〈相撲〉の京都府舞鶴市での春巡業で舞鶴市長が土俵上で挨拶中倒れ、土俵に上がり救命措置をした女性達に、行司が場内アナウンスで土俵から下りるよう求めたということが報じられました。イスラエルであれ、日本であれ、それぞれの国には、それぞれの歴史・伝統・文化があります。私たち各自もそのような歴史・伝統・文化の中でこの生を享けた者です。しかしどのような歴史・伝統・文化にも、神様の御旨に沿わないものはあります。ですからその非人間的な差別は改めて行かねばなりません。いかなる歴史・伝統・文化も相対的なものです。主イエス・キリストによって示された「絶対の真理」ではありません。むしろ「絶対の真理」によって、是正されて行くべきものなのです。

◆4節～6節でパウロはこうっております、「とはいえ、肉にも頼ろうと思えば、私は頼れなくはない。だれかほかに、肉に頼れると思う人がいるなら、私はなおさらのことです。わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人で

す。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。」パウロは自分の前半生を誇ることができる程に、信仰に精進し、律法遵守に精励しました。しかし、キリスト者迫害に向かったあのダマスコ途上で、復活の主の顕現に遭遇し、その過信、熱心の誤りを思い知らされます。そして、これまでの古い人間サウロは打ち砕かれ、新しい人間パウロに生まれ変わらされます。「主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値」に目覚めたのでした。この様にしてキリスト者パウロが誕生しました。例えば、上に「ベニヤミン族の出身」とあります。あのイスラエル最初の王「サウロ王」は「ベニヤミン族の出身」でした。パウロの本名「サウロ」もこのベニヤミン族出身のサウロ王から取っているのです。回心後の「パウロ」は「小さい」という意味のラテン語です。パウロの自覚は「自分は最も小さい者より更に小さい者」なのです。

◆このようにキリスト教信仰は、自分自身から唯キリストへと軸足が変わることです。自分自身の信仰にも、行いにも、熱心にも依り頼まず、ひたすら主イエス・キリストに依り頼むことなのです。9節に「キリストへの信仰による義」とあるのですが、これはストレートに、端的に訳せば、「キリストの真実による義」となります。このように訳すことがパウロの信仰と思いにそうと思います。パウロはキリストを信じる自分の信仰さえも相対化するのです。それは、主イエス・キリストを知ることの絶対の価値に満たされ、覆い尽くされているからです。8節でこう言います。「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています」と。私自身の愛唱聖句であるローマの信徒への手紙第8章38節～39節でパウロはこうも言っております。「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のもものも、未来のもものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」と。

◆わたしたちは、主に召された使徒パウロのキリスト証言を通して、今更のように自分たちが与かることを許されている御独り子・主イエス様をさえ惜しまず賜わるほどの神様の御愛の限りなさを覚え、いかなる感謝の言葉も御愛に報いることができないことを覚えます。今日の聖書の個所に続く所で使徒パウロはこうも言っています。「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えくださる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」と。私たちも、先立ち給う主イエス様の御導き、御憐れみに信頼し、どこまでも従ってまいりましょう。

◆お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神様。あなたがわたしたちをこれ程までに愛し、顧みてくださることに對し、報いるすべはありません。ただただ感謝し、御名をほめたたえます。すべての国々の全ての人々と共に、そして私たちの肉に連なるすべての者と共に、「イエス様だけが主であられます」と告白し、主イエス様の御執り成しにお継りし、この祈り、願い、感謝を御前にお捧げいたします。アーメン。